

# 特集にあたって

湊一樹  
「インド政治経済」

## ●華麗なる(?) 転身と読書

日本を代表するロシア語同時通訳者として活躍するかたわら、作家としても高い評価を受けていた米原万里がこの世を去ったのは、二〇〇六年五月のことであった。

作家デビューが四〇代半ばと比較的遅かったうえに、二年半に及ぶガンとの闘病の末に五六歳という若さで亡くなったこともあり、米原が本格的に著述活動に取り組んだ期間は、ほんの一〇年余りにすぎなかった。

しかし、この短い間に生み出された作品の数は驚くほど多く、軽妙洒脱なエッセイ(例えば、参考文献①～③)から自伝的要素を巧みに取り入れたノンフィクション(参考文献④)や長編小説(参考文献⑤)に至るまで、その内容も実に幅広い。そしてさらに、質の高さもしっかりとともなっている。

彼女の著書が名のある文学賞を立て続けに受賞していることに加え、読書好きの人たちの間でも高い人気を誇っていることから、この点は明らかである。

では、これほどの神業的な芸当が、なぜ可能だったのだろうか。その最大の要因は、彼女がそれまでに尋常ならざる量の読書をしてきたことにあるのではないだろうか。実際、米原万里の書いたものを読むと、最も重要な「幹」の部分は、膨大な読書から得られた確固とした知識に裏打ちされていることがよくわかる。その一方で、思わず笑ってしまうようなエピソード(例えば、同時通訳の内幕や自身の失敗談)やどぎつい下ネタ(例えば、参考文献②の二七二～五ページ)といった目が行きがちな部分というのは、あくまでも「枝葉」にすぎないのである。

おそらく、作品のなかに笑いの要素をふんだんに盛り込んでいるのは、単なるサービスピ精神からだけではないだろう。むしろ、学術論文を書くように生真面目に筆を進めてしまいがちな自身の性格や読書によって培われた溢れんばかりの教養と知性をカモフラージュするためなのではないだろうか。この見立てが当たっているかどうかは定かではないが、たいしたことのない内容を高尚にみせようとすると書き手がたくさんいる(研究者にもこういう手合いが実に多い)なかで、あえてその逆を行きながら、知的刺激に満ちた作品を書き続けることのできた米原万里という作家が稀有な存在であったのは確かである。

## ●ストーリーもなる……

幼少期から思春期にかけて、彼

女が浴びるように読書をしていたことを示す数々のエピソードについては、本人のエッセイに譲るとして、読書に対する異常なまでの情熱は、長じてからもまったく変わることはなかったようである。そのことを何よりもはっきりと物語っているのが、作家としてデビューした直後から亡くなる直前までの間に彼女が書いた全書評を収録した、『打ちのめされるようなすごい本』(参考文献⑥)と題する書評集である。

六〇〇ページ近くあるこの分厚い本からは、読書人としての米原万里の「大食いぶり」と「雑食ぶり」を知ることができるだけでなく(ちなみに、実際の食事についても、彼女の食欲と食べるスピードは凄まじかったとか)、むしろそれ以上に、「労多くして益少し」の典型ともいえる書評の執筆という仕事を心から楽しんでいた様子がひしひしと伝わってくる。彼女の手による書評を読んでいるうちに、紹介されている本を実際に読んでみたくなったとしても、何の不思議でもない。

最初で最後となったこの書評集の巻末に収められている「文庫版のための解説」のなかで作家の丸

谷才一は、派手好みの彼らしい表現で、米原万里の好きぶりを次のように賞賛している。

「何しろ彼女は、スターリンをきびしく弾劾したあとで、彼が『激務の合間に一日五百頁を読破する読書家』であつたと書きつけ、ほんのすこし、しぶしぶ、好意を寄せるくらゐの読書人だつた。自分と同じやうに本好きだと知ると黙つてはゐられないのだ。いい人ですね。かういふ人のいい感じも私は好きだ。」(参考文献⑥、五七〇ページ)

## ●本の森への道案内

丸谷は、この引用部分よりも少し前の所で、書評家として米原が優れている点を三つ挙げ、特に最後の点を一段と強調している。

「第三に、一冊の本を相手どるのではなく、本の世界と取り組んでゐる。

本といふのは単独の存在ではない。何冊も何十冊も、いや、何万冊も何十万冊もの本が群れをなして宇宙を形成してゐる。たとへば夏目漱石の『三四郎』なら、ヨーロッパの教養小説の伝統(ゲーテ

の『ウィルヘルム・マイスター』とかフローベールの『感情教育』とか)があつて、漱石がそれに親しんでゐるから書くことができた。その『三四郎』を読んで森鷗外が刺戟されて『青年』を書いた。『三四郎』や『青年』のせいで出来た日本人作家の作品はあまりにも多くて、ここにあげきれない。(中略) 書評家は本の世界と向ひ合ひ、この一大星雲とつきあはなければならぬ。

米原万里はさういふ資格をきれいにそして充分に持合せてゐる人だつた。」(参考文献⑥、五六八～九ページ)

本の世界というものがどのようにして形成されているのかをとてもわかりやすく説明した一文である。この引用文のなかで、丸谷は本の世界を「宇宙」や「星雲」に例えているが、この特集では、あえて本の世界を「森」に例えてみることにした。整備された遊歩道に沿つて着実に進んでいく(体系的に読書をする)のもよいし、そこから少し外れて、道なき道を自ら切り開いていく(興味の赴くままに濫読する)のもよいように、森での散策(読書)には、人それ

ぞれのいろいろな楽しみ方があると思うからである。

「森」という表現にこだわるのには、もうひとつ理由がある。薄暗くて、静かで、ひんやりとしていて、書架に所狭しと本が並んで、図書館のなかを歩いていると、時として、鬱蒼とした森のなかにいるかのような錯覚に陥ることがあるからである。

\* \* \*

今回の特集では、二〇名の選りすぐりの執筆者の方々に、大きな影響を受けた本、お気に入りの本、お薦めの本などを自由に挙げてもらっている。実際に読んでいただければおわかりのとおり、期待に違わぬ素晴らしい内容の書評が並んでいる。みなさんの今後の読書の指針として、是非ともご活用いただきたい。

なお、専門分野、男女比(女性八名、男性一二名)、所属先(外部から八名、アジ研内から一二名)などの面で大きな偏りが出ないよう執筆者の人选を行ったことも影響しているのか、結果的には、実に多種多様な本が紹介されている。また、執筆者間の調整などは

一切行っていないが、同じ本が複数の執筆者によって取り上げられることもなかったという点を一言付け加えておきたい。

最後に、みなさんの「本の森」での散策に今回の特集が少しでもお役に立つことができれば、特集の取りまとめ役として、これ以上の喜びはない。

それでは、お気を付けて！

(みなと かずき／アジア経済研究所 南アジア研究グループ)

## 《参考文献》

- ① 米原万里『不実な美女か貞淑な醜女か』新潮文庫、一九九七年。
- ② 『魔女の一ダース——正義と常識に冷や水を浴びせる一三章——』新潮文庫、二〇〇〇年。
- ③ 『ガセネタ&シモネタ』文春文庫、二〇〇三年。
- ④ 『嘘つきアーニヤの真つ赤な真実』角川文庫、二〇〇四年。
- ⑤ 『オリガ・モリソヴナの反語法』集英社文庫、二〇〇五年。
- ⑥ 『打ちのめされるようなすごい本』文春文庫、二〇〇九年。